

# G は「言語」の G

郡司 隆男

神戸松蔭女子学院大学 言語科学研究所  
gunji[at]shoin.ac.jp

---

## G for “Gengo”

GUNJI Takao

Shoin Institute for Linguistic Sciences, Kobe Shoin Women’s University

### Abstract

本稿は、2008 年から 2016 年にかけて、G’s diary と題して不定期に掲載していたブログの中から、言語学ないし言語に関するものをまとめたものである。

This is a collection of blog articles concerned with linguistics or language, written irregularly as *G’s diary* between 2008 and 2016.

キーワード: 言語学、言語、ブログ

**Keywords:** linguistics, language, blog

### はじめに

2008 年から 2016 年にかけて、学長在任中に、G’s diary と題して、ブログを不定期に発表していた。Diary と称しながら、しだいに間隔が空き、大体、月に 1 度（しかも月末）のペースになっていったが、何とか、毎月の更新は続けることができた。

G については、開設時のアナウンスに説明がある。

開設にあたって

近く、「G’s diary」と称した、不定期の連載をはじめます。日頃思うことなどを気ままに書いていきたいと思いますが、何分はじめての試みなので、形式、長さ、文体、間隔など、しばらくは試行錯誤が続くと思います。ご容赦のほどを。

ところで、diary は「日記」でいいとして、G とは? こういう変なタイトルにしたのは、2 つの意味を込めたかったからです。1 つは公人としての G。新米学長がいかに

仕事を学んでいくか、その成長の過程(?)を明らかにしていきたいと思います、というほど、大げさなものではありませんが。

もう1つは、私人としてのG。こちらは、まったく仕事を離れて、あるいは、少なくとも、公人としての仕事を離れて、一研究者、一人の父親、一匹の犬の飼い主、といった立場で、思うことを徒然なるままに書き記していこうかと思います。

ところで、日記は本来毎日書くものですが、公私ともに、それほど暇なのか、と思われても何ですので、とりあえず、更新頻度は不定期ということにしておきます。何かネタが見つかったら書くこともある、という程度に気楽に考えておいて下さい。

しかし、終ってみると、Gにはもう一つの意味があることに気付いた。「言語」のGである。したがって、以下は、学長である郡司による言語に関するG's diaryということになる。大学教員生活の最後の年度に書く文章にしては、学術性にはやや欠けるかもしれないが、言語(学)に関するエッセーとしてお読み頂けると幸いである。<sup>1</sup>

## 1. しなやかに、したたかに 2008.07.09

Raymond Chandler の遺作 Playback<sup>2</sup> に有名な科白がある。

“If I wasn't hard, I wouldn't be alive. If I couldn't ever be gentle, I wouldn't deserve to be alive.”

ちなみに、清水俊二訳のハヤカワ文庫では、次のように訳されている。

「しっかりしていなかったら、生きていられない。やさしくなれなかったら、生きていく資格がない」

ただし、一般には、hard の部分が「強く」とか「タフ」という訳で伝わっていることが多い。もともとは、おなじみ私立探偵の Philip Marlowe が、女に「あなたって、とっても hard な人なのに、なぜこんなに gentle になれるの?」と言われて、半ば照れ隠しに(?) 言ったのが上のセリフである。だから、単に自分のことを言ったにすぎない。その後、ある日本映画の宣伝文句に採用されて以来、主語が「男は」というように一般化されてしまったようだ。

そこで、キーワードの hard と gentle の、自分なりの超訳を考えてみた。それが標題である。順番は逆になるのだが、「したたかでなかったら、生きていけない。しなやかでなかったら、生きていく意味がない」というつもりである。

今日、女子大といえども、卒業生を「可愛いらしさ」だけで社会に送り出すことはできない。高い就職率の実績を維持していくためにも、大学の4年間で学んだことをしっかり身につけさせて送り出したいという思いがある。そのためにも、一定の強さはもたせる必要がある。ただし、「したたか」は、「健か」と書くこともあることからわかるように、人を出し抜く強さではなく、健全なたくましさということである。

といっても、勉強勉強でガチガチの頭になってしまったのでは、社会に出てすぐつまずいてしまうだろう。言われた通りのことしかできないロボットのような頑固さは社会

<sup>1</sup>TALKS に採録するに当たっては、主な言及した文献を脚注で明示しておいた。また、最近の関連する文献なども挙げてある。この部分だけ、論文のような形になっていると言えるかもしれない。

<sup>2</sup>Chandler (1958)。

では役に立たない。必要なのは、自分の頭で考えて、臨機応変に対応できる柔軟さ、つまり「しなやかさ」である。

しなやかで、いくら曲げてでも折れないということは、「したたかさ」にも通じる。つまり、結局のところ、「しなやか」と「したたか」は1つのコインの裏表にすぎないのだろう。

実はもう1つ「し」ではじまり「か」でおわる言葉がある。「しとやか」である。「しなやか」で「したたか」で「しとやか」であったら、それこそ鬼、いや、「天使に金棒」であるが、どうだろうか。これは今日の女子大生には過大な要求ということになるのだろうか。

## 2. 「ブログはじめました」2008.08.15

今週は大学は「盛夏休校」で休みである。4月以来、時間がとれなくてのぼしのぼしになってる原稿とか、いろいろと仕事を家にもって帰ってきたが、案の定、遅々として進まない。

いちおう今週は気分だけでも言語学にしておかないといけないので、いささか「学問的な」話。

最近あちこちのウェブサイトで「ブログはじめました」というようなお知らせを見ることが多くなった。なかには「ブログはじめました」というタイトルのブログをはじめている人もいたりしてややこしい。一方、第1日目のタイトルが「ブログはじめました」で、その後全然書きこみがないところもある。はじめたはいいが、後が続かないというのはよくある話だ。

何年も前に、どのような名詞が *begin* という動詞と一緒に使えるかということを論じていた本<sup>3</sup>を読んだことがあった。*begin a book* と言うと、本を書くか読むかになるが、*begin a table* とは言いにくい。これは、名詞の意味を考えればある程度想像がつくが、英語で言っても日本語では言えないものも多い。「本を始める」は日本語では無理だろう。そこらあたりから日本語と英語の違いを考えることができる。

日本語の方では、昔はよく、夏になると「冷麺はじめました」という貼りが食堂にあたりした。「冷麺」は始められるものらしい。もちろんこれは冷麺を提供し始めたということであり、店主のような立場の人間でないと使えない。一個人が、「食べ始めた」という意味では使えないのである。

ブログは一個人でも始められる。何で *web log* の *we* だけをとりさって *blog* としたのかわからないが、今や、ジーニアス英和辞典や広辞苑の新版にも見出しとして採用された、れっきとした英語であり、和製英語ではない。もちろん *begin a blog* とも言える。

今日も暑い一日だった。さて、そろそろナイトキャップを始めるか。ちなみに、帽子の方のナイトキャップは、綴りはちがうが、*biggin* とも言う。そういえば、昔、*Begin the Beguine* という名曲があった。この *beguine* は西インド諸島の踊り。また、禁欲的なベギン会修道女のこともである。ややこしい、早くも酔いが回りそうだ。

<sup>3</sup>Pustejovsky (1995)。

### 3. 指先、指の先、夢の先 2009.02.12

「先」という言葉にこだわっている。「先」には大雑把に言って、《先端部分》という意味と《延長した方向》という意味がある。「指の先」にもこの2つの意味があって、《指の爪の生えている付近》を意味する場合と、《指で差し示している彼方》を意味する場合がある。おもしろいことに、「指先」には前者の意味しかない。

以前あるところで、犬にはこの2つの意味のうち後者がわからないようだ、ということを書いたことがある。我が家の犬も、何かを指で示すと、その指そのもの、あるいは指がさわっているものを見ることはあっても、指の差す方向を延長した先にあるものは見てくれない。つまり、「指の先」にあるものを見てほしいのに「指先」しか見てくれないのだ。

日本語に「こ・そ・あ」の体系があることはよく知られているが、指が触れているものは「こ」の世界のものである。指の差す方向にあるものは「あ」の世界である。どうやら犬は「こ」の世界にしか生きていないらしい。指差して「ここ」を示すことはできるが、「あそこ」を示すことはできない。

「あ」の世界は、自分の「こ」の世界からも相手の「そ」の世界からも中立な世界である。自分と相手が同じ方向を向いて見る未来である。犬はあくまでも現在を生き、人間は、かりに現在がだめでも未来に期待して生きることができる。

指の他に「先」が使える体の部分はないかと考えてみると、「目先」「鼻先」「口先」「手先」などが見つかった。しかし、なぜかいずれもあまりいい意味で使われることはない。「目先の利益に目を奪われ、鼻先で笑われる口先だけの男が手先に使われる」と続けると、まるで人生の落伍者を極めたかのようなのである。

もう少し元気の出る「先」はないものかと思ったら、昔「夢先案内人」という歌<sup>4</sup>があったことを思い出した。検索してみても歌詞の中にはこの語が出てこないのに、タイトルの中だけの言葉だが、「夢先」という語は辞書に載っていない。新造語なのだろうか、この「先」はどういう意味だろうか。「夢」に先端部分があるとも思えないので、夢の発展していく方向だろうか。

まさか、夢の先は醒めた後の現実、というのではないでしょうね。

### 4. ラテスカービベ 2009.04.12

関西でのお花見の季節も終わりにかかり、葉桜を楽しむ時期になった。

家の近くの川沿いの公園が桜の名所で賑わっているが、新聞によると、先週の日曜は家族連れが多かったらしい。そういえば、今年は会社の新入社員による徹夜場所取りが少なかったような気がする。景気とお花見には関連があるのだろうか。

毎年この季節には屋台が多く店を出す、満開を過ぎるとともに、ぼちぼち撤退の用意を始めている。日曜の朝の犬の散歩のときに荷作りをしているのを見かけたので、土曜日の営業を最後に日曜日に北に移動してしまう店もあるらしい。

<sup>4</sup>1977年リリース。作詩 阿木燿子、作曲 宇崎竜童、歌 山口百恵。

屋台も、ちょっと前は中東風の人がシシカバブを焼いていたりしたのを見たことがあったが、今年は伝統的なものばかりだった。甘い甘い「ベビーカステラ」などは3軒くらいあり、その看板がテントの前と左右に書いてあるのだが、向かって右側は「ベビーカステラ」で、左側は「ラテスカービベ」となっている。

これは文字の右側が店の前面になるので、前から後ろへ向かって読んでくれということなのだろう。同じようなのに「めあごんり」「きやちもズーチ」などがあって、名前だけ見ていると、まるで異国の市場にまぎれこんだような気になる。もっとも異国でかな書きの看板を見るはずはないが。

中には、「つか串」「焼玉かい」などもあって、日本語として違和感がないので、さらっと読んでしまって、その後で「ん?」となる。

日本語は縦にも横にも書けるという点で世界に類を見ない表記体系をもつことで知られている。しかも、横書きは昔は右から左にも書いていた。屋名池誠氏の綿密な調査<sup>5</sup>によると、看板とか掛軸、新聞の見出しのように、1行1文字の縦書きと解釈できる場合もあるが、2行以上にわたって右から左へ文字を並べた例もあるようで、縦書きの伝統の中に横書きが導入されたときにはいろいろと混乱もあったらしい。それが延々と屋台の看板に引き継がれているのだろうか。

本学には残念ながら桜の木があまりない。そのため学内でお花見をしているという話もあり聞かないし、当然、屋台も来ない。しかし、桜の満開の時期は新学期が始まり、学生が帰ってくるころなので、キャンパスが別の形で華やかになってくれる。

## 5. その他のゴミ 2009.09.29

長時間の乗り物では、ペットボトルの飲み物が欠かせないが、空ボトルを手にしてホームに降りると、ゴミ箱をさがす。旅行中はボトルに蓋をしたまま捨ててしまうが、本当は、リサイクルのためには、ペットボトルの本体と蓋と回りのビニールは分ける必要がある。それぞれに再生の用途が違うのだろう。市の月2回のペットボトル回収日には、蓋とビニールは一般ゴミ扱いであり、そもそもリサイクルしていない。

しかし、特に蓋だけを集めようという活動がある。本学でも今年から、学生と教職員のボランティア活動で、蓋の回収場所を設けている。これを800個業者に送ると20円で買いとってもらえて、ポリオのワクチン1人分が賄えるそうだ。もちろん蓋が直接ワクチンの原料になるわけではないが、本体とは別の役立て方があるらしい。

さて、駅のホームで蓋とビニールを本体とは別に捨てるとする。これらは、家では一般ゴミだが、ホームに、3つか4つ並んでいる箱のどれに入れたらよいか。箱を順に見ていくと、いきなり「その他のゴミ」という箱が目に入ることがある。これが一番最初に目にした箱の場合、蓋とビニールをその箱に投げ入れてよいかわからない。3番目か4番目に「ペットボトルの蓋」とか、あるいは「ペットボトル関連」とかいう箱が出てきたらどうするのだ。今まで、そういう箱に出会ったことはないが、なにしろ旅行中の身である。どのような分別方針のところに来ているかわからない。例えば、「石油からでき

<sup>5</sup>屋名池 (2003)。

たもの」というような箱で「紙」と別にビニールを捨てさせているところならばあってもおかしくない。結局最後まで見て、またはじめの箱に戻ってくることになる。

ことばの使い方としては、「その他」の「そ」は、それまでに出てきたものを指す。だから、いろいろと順番に並べていって、最後に「その他」とするのである。ゴミ箱を配置した人には、3つか4つの箱を見ていく順番に一定のイメージがあったのかもしれないが、駅のホームのように、人がどちら向きに歩くかわからないところではそのような前提は崩れる。ここはやはり、「燃やすもの」のように、それ自体で意味をなすような表現にすべきだろう。

「その他」というのは「そ」に依存してしか自分を決められない身分である。大学も「その他の大学」にならないように、それ自体の意味をもっていかななくてはいけない、と強引におとしておく。

## 6. 他人事 2010.02.28

「ひとごと」とは自分に関係ないということである。これを漢字で「人事」と書くと、「じんじ」と読みまちがえそうなので、「他人事」と書くのが普通である。

ところが、こう書くと「たにんごと」と読む人が出てきて、今日では、限定付きで辞書にも載っている。『広辞苑』の場合、第4版までは載っていなかったようだが、最新の一つ前の第5版から、「ひとごと」に「俗に『他人事』の表記にひかれて『たにんごと』ともいう」という註釈がついている。

「たにんごと」には違和感を感じざるを得ない。ちょっと前までやっていたお気に入りのSF時代劇<sup>6</sup>で、武家の娘が「たにんごと」と言っていたが、よくできていたドラマだけに残念だった。

なぜ「ひと」に「他人」の字をあてるのだろうか? おそらく、そもそも「ひと」は《人間》一般を意味するのでなく、《自分以外の人間》すなわち《他人》を意味したからだろう。

例えば、「人の振り見て我が振り直せ」は、他人の振る舞いを見て自分の振る舞いを直すことであり、自分の姿を鏡で見てチェックするという意味ではない。

昔は、「人様に笑われますよ」という言い方をした、この「人様」は「世間」であり、昔は「人の目」を気にしたものだった。電事の中で物を食べるような「傍若無人」な人は昔は少なかったのだ。

ことわざにみる「人」は、どうも厄介なものらしい。「人目を気にする」「人聞きが悪い」「人の噂も75日」とか、目、耳、口にわたって、他人というのは、いっそ存在しなければ余程すっきりするようなものようだ。

「人」が基本的には他人をあらわすとなると、「私って褒められると伸びる人だから…」というような表現に感じる違和感も明らかになる。「私」すなわち自分を「人」と言っているからである。もっとも、この表現は全体として激しく違和感に満ちていて、「人」を「性格」とかに言い替えても変だ。

<sup>6</sup>2009年、TBS系「日曜劇場」で放送の『JIN—仁—』（第1期）。

一つだけ、自分をあらわす「人」があった。「人の気も知らないで…」である。この「人」は「私」であり、自分である。しかし、よく考えてみると「知らない」の主語は相手であり、その相手から見たら自分は他人でしかないのだ、という無念さがこもっている表現のようにも見える。すると結局、「人」は他人なのだろうか。

## 7. 左側 2010.03.31

先週、私立大学協会の春季総会で東京に日帰りで行ってきた。

東京で気を付けなくてはいけないのは、エスカレータである。周知のように、東京と大阪・神戸では、エスカレータの乗り方が違う。一般には、「東京では左側に立ち、大阪では右側に立つ」とされる。

これは実は間違いである。正しくは、

東京では左側に立ち、大阪では左側を歩く

である。

つまり、東京も大阪も、エスカレータは基本的に左側を使うものであるという点は共通なのだが、大阪人にとって、エスカレータは「立って乗る」ものではなく、「段差付動く歩道」であり、混んでいるときには、左側だけでなく右側も歩いている人が多い。

エスカレータの左側の使い方が東西のどこで切り替わるかという点については柳田國雄の「方言圏論」とのからみで面白い話題があるのだが、長くなるので別の機会に。<sup>7</sup>

空港などにある、平面上の動く歩道上では、ほとんどの人が歩く。止まっていると普通に歩くよりかなり遅くなるからである。歩くだけでも、歩幅が大きくなったような爽快感があるが、某有名人が、動く歩道を走ると超現実的な体験になるとエッセーに書いていた。安全上は好ましいことではないのだろうが、乗り継ぎで時間がないときには、それを口実にしてやってみたい衝動に駆られるかもしれない。

上りのエスカレータの場合には、立ったままでも、その横の階段を普通に上る人よりは速いことが多い。しかし、エスカレータ上で歩けば、確実に階段を上るより速くなる。いらいち(=せっかち)な大阪人としては、これを見逃すはずがない。何しろ、青信号に変わるまであと何秒と出る土地柄なのだから。

<sup>7</sup>【以下、「別の機会」がなかったので、省略した部分に加筆】

東西の文化差というと、方言の違いが有名である。民俗学者の柳田國男は『蝸牛考』(柳田, 1980)で「方言圏論」という学説を提案した。デンデンムシ(カタツムリ)を意味する方言の単語を調べると、京都を中心とした同心円状に分布し、中部地方と四国、東北地方と九州で同じ形が見つかるという。つまり、京都から昔の言い方が東と西とに広がっていったと考えられる。

同じことを 20 世紀に調査した番組がある。関西では金曜夜の定番番組であるが、関東ではとんでもない時間に放送されているらしい「探偵! ナイトスクープ」である。ここで、「アホ」と「バカ」の分布が報告されている(松本, 1993)。この調査によると「バカ」は古い形で、関東や、中国地方に分布し、より新しい形が「アホ」であり、京都を中心とした地方で使われている。

さて、エスカレータの左側を「歩く」か「止まる」かの分布はどのようにになっているのだろうか。やはりすでに調べている人は何人かいるようで、例えば、斗鬼(2015)によると、左側を歩くのはほぼ阪神間(大阪府と兵庫県)に限られ、そこから離れると止まる(歩くとしたら右側を歩く)ようになると言う。意外なことに京都でも左側では止まる人が多いようなので、言葉と違って、左側歩きの発祥の地は大阪なのかもしれない(阪急電鉄が 1970 年の大阪万博のときに右側立ちを呼びかけたというが、その後、1998 年に呼びかけは中止している)。そして、圏論が正しいとすると、左側を歩くのは比較的新しい文化だったのだろう。もっとも、後発の東京では反対側の右側を歩くことになったのだが。

エスカレーターに関しては、エレベータと合わせた総元締めとも言うべき、「日本エレベータ協会」が、歩くことは推奨しないとしている。<sup>8</sup> 安全上そのように設計されていないからだという。かと言って、片側立ちを推奨しているわけでもなく、片寄らないように立ってほしいということだ。左右に2人が立つか、1人の場合には真ん中に立つのが望ましいらしい。

しかし、実際には、1人だからといって、真ん中に立っていたら、まちがいなく関西では邪魔に思われる。右側に立つか、他の人と同じように左側を歩くかで悩むよりは、階段を歩いてしまう方が心身の健康にはずっとよいのは確かである。

## 8. 蝉とゼミ 2010.07.29

梅雨も明けて、晴れの暑い日が続いている。それとともに朝早くから蝉の鳴き声もいっそう激しくなってきた。今の時期に多いクマゼミは、虫の鳴き声というよりは、絶えず何かをこすりつけているかのような騒がしさである。

蝉は夏の間に、優勢を占める種類が入れ替わる。まず、ニイニイゼミが鳴きはじめ、続いてジージーとアブラゼミが鳴き、シャーシャーとクマゼミが悩まし、ミンミンゼミもそれに加わって盛夏を迎える。8月も下旬になるとオーシンとツクツク法師、カナカナとヒグラシが鳴き、気分は早くも秋である。

蝉の名前が皆「～ゼミ」と濁っているのは、日本語には連濁と言われている現象があって、本来「セミ」であるべきものが、それぞれの種類をあらわす語が前について複合語になると、濁音化して「～ゼミ」となるからである。

ところで、「ゼミ」と言えば、「卒論ゼミ」など、大学の後半にとる授業の一つの形態のことでもある。ゼミは通常少人数に分かれて何人かの教員が分担して指導するので、「郡司ゼミ」のように、その指導教員の名前をつけて呼ばれる。

こちらの「ゼミ」は、ドイツ語の「ゼミナール」から来たものだが、科目名に「ゼミナール」は使わない。「ゼミ」はあくまでも「ゼミ」なのである。英語では「セミナー」になるが、これも大学の正式の授業ではないみたいに響くので使わない。したがって「～ゼミ」も「セミナー」を略した「セミ」が連濁によって「ゼミ」になったわけではない。

「蝉」と「ゼミ」の言語学的な違いのもう一つは、前者は、もともと「セミ」という平板なアクセントの単語なので、「～ゼミ」となっても平板に発音されるのに対して、「ゼミ」の場合は「ゼ」にあるアクセントが保たれるということだ。したがって「郡司ゼミ」は、平板に「グンジゼミ」という蝉の名前と同じようには発音されない。

蝉は、7年前後土の中において、ようやく外に出たと思ったら7日間（あるいはもっと長く）鳴きあかすのを頂点に命を終えると言われる。それを思えば、クマゼミのうるささも寛容の精神で迎えるべきなのかもしれない。

卒論ゼミの方は、3年以上、土の中ならず、大学で勉強したことの集大成である。それを7日で書き上げるなどということがあってはいけないし、また、書いて提出してしまえばおしまいというわけでもない。

<sup>8</sup><https://www.n-elekyo.or.jp/instructions/escalator.html>



時々、卒論をきっかけに勉強の楽しさがわかったと言ってくれる学生がいるのはうれしい。もっと早く気付いてくれればなおよいのだが。

## 9. かもめの水兵さん 2010.08.31

長い間、この歌は「…白い帽子、白いシャツ、白い靴…」と続くのだと思っていた。かもめは上から下まで真っ白なんだなあ、と一人納得していたのである。

ところが、朝の散歩道の川に時々やってくるかもめを見て、足が黒いのを見て愕然とした。今までとんでもない誤解をしていたのではないか。これはどういうことかと考えると、次のような可能性が思いついた。

- (1) 川で見たのは実はかもめではなく、足の黒い別の鳥である。
- (2) 実際のかもめと無関係に、ある種理想的なかもめの歌である。
- (3) 歌詞を覚え間違えていて、実は「… 黒い靴…」だった。

そこで念のためにウェブでかもめの画像を探すと、(1)の可能性が出てきた。どうも顔が違う。足が真っ黒なかもめはいない。しかし、足まで真っ白なかもめというのみなさそうなのだ。大体、背中や羽は白くないし。(2)の可能性も否定できない。

先日、ラジオで、連日、「かもめの水兵さん」を違った歌手で放送したことがあった。あらためて聞いてみると、やはり「… 白い靴…」と歌っているように聞こえる。すると、やはり(2)なのだろうか。

もっと早くウェブで「歌詞」を検索するということに思いあたればよかったのだろうが、真相は、この段階で明らかになった。正解は、(3)に近いが、

- (4) 歌詞を聞き間違えていて、実は「… 白い服…」だった。

その上で翌日の放送を聞いてみると、確かに「… 白い服…」と聞こえた。要するに空耳だったのである。

なぜ、「白い服」という可能性を無意識に排除していたかということ、その前の「白いシャツ」のせいである。すでに服の一部に言及しているのだから、その次は服の他の部分か服以外のものであるべきだろう、と思っていたのだ。

これは意味論の問題である。だから「白いズボン」ならば納得だが、かもめがズボンを穿いているとも思えないので、服の他の部分は省略して一気に「白い靴」に言及したと思ったのだろう。

「白い帽子」と「白いシャツ」からなるかもめの衣裳を「白い服」と総括しているのだと考えることもできるが、帽子とシャツだけで「服」というのはあんまりだという気がする。きちんと上下を揃えて、

白い帽子、白いシャツ、白いズボン  
白い服着てすましてる

のような歌詞の展開ならば納得がいくのである。音韻論的にはちょっと不揃いだが、歌えなくもない。

しかし、例の足の黒い鳥はどうもサギらしい。騙されたような気分。

## 10. 白線の内側 2010.10.31

駅でのアナウンスに「危険ですので白線の内側にお下がりください」という類いのがある。ホームがいわゆる島式で、両側に線路がある場合にはよくわかる言い方だが、真ん中に線路があって、その両脇にホームがある相対式の場合には、一体どちら側に下がったらいのか迷う。

ということは実際にはなくて、誰でも線路から遠い側に下がるのだが、その場合、「内側」という言い方がしっくりこないと感じている人も多いようである。相対式ホームでは線路から遠い方向は駅全体から見たら「外側」になる。これを「内側」と言えるのは、なぜだろうか。

例えば、無人駅で、ワンマンカーの運転手が、電車の中から、外の相対式ホームで待っている乗客にアナウンスする場合を考えてみる。実際そのような運行をしている鉄道会社があるのかどうかは知らないが、「危険ですので白線の外側にお下がりください」と言いそうな気がする。

言うまでもなく、ウチ、ソトというのは、仲間とそれ以外とを分ける発想である。境界線を挟んで、自分に近い側がウチであり、遠い側がソトになる。つまるところ、アナウンスする人にとっては、線路は自分から遠い側、ソトであり、「危いから私の方に寄りなさい」ということなのだろう。

ところで、「白線の内側」以外に、「黄色い線／ホームの内側」とする駅もある。白線は単なる線だが、「黄色い線」は、線というより、かなりの幅の点字ブロックである。<sup>9</sup>

また、「ホーム」となると自分の居場所という感じが強くなる（因みに「ホーム」は platform の略であって home ではない）。

この場合、相対式であっても「ホーム」はその片側だけを指す。その内側はホームの中で駅舎に近い側である。駅舎がホームの線路側にあるということは通常ないから、「内側」は線路から遠い側になる。もっとも駅舎が線路をまたぐ形で上にある場合にはどちらが内側かわからなくなかなかねないが。

今週末は大学祭が開かれる。日頃「内側」に入りにくい女子大の中を見てもらう絶好の機会でもある。「華やかですので門の内側にお上がりください」というところだろうか。

<sup>9</sup>最近の阪急電車では、次のような言い方をしている：

黄色い点字ブロックの内側にお下がりください

また、ホームには、乗車位置に次のような掲示が貼りつけてある

黄色い点字ブロックの内側に2列に並んでお待ちください

Please form two lines behind the yellow braille blocks

2行目に、英語表示が並べて掲示されている。英語では、日本語の「内側」が behind となっていることが興味深い。英語を話す人には、inside the yellow braille blocks では意味不明だからだろうか。日本語でも「黄色い点字ブロックの後ろに」でいけるような気がする。

実際、斜面に沿って建っているキャンパスなので、坂を上がってもらわなくてはならないのだが。

（調べていたら、「危険ですから」というアナウンスもあることを知った。「から」と「ので」の使い分けも面白い話題だが、これはまたの機会に。）

## 11. 「ら抜き」字幕 2011.02.28

いきなり日本語の文法の話で恐縮だが、中学校などで習う規範文法<sup>10</sup>では、「見る」「寝る」などの一段活用動詞の可能形は「～られる」と言うことになっている。「見れる」でなく「見られる」、「寝れる」でなく「寝られる」というのが「正しい」言い方とされているのだ。

もちろん、今日、誰もこんな「正しい」言い方をしない。若者に限らず、一定の年配の人でも「見れる」「寝れる」「来れる」などを平気で使っている。

言語学者にとって、文法は研究し記述するための対象であり、規範を定めて押しつけたりはしないが、自分自身の書き言葉には一定の規範意識が働くことが多く、文章表現に「見れる」や「来れる」を書くことは相対的に少ない。

最近、話し言葉を書いたものを見る機会が多くなってきた。TVでの字幕（テロップ）である。あれは一説には、関西で高視聴率の番組「探偵！ ナイトスクープ」が始めたと言われているが、今日では全国的に広がっている。

NHKでも、ニュースなどで、街の人の声に字幕が伴うことが多い。その際に前から気になっていたのが、明らかに「見れる」と言っているのに、字幕では必ず「見られる」と書き直されたことだった。言うまでもなく、これにはNHKなりの規範意識が働いているのだろう。

ところが先日、NHKで初めて「僕らはまだ夢を見れるんだ」という字幕を目にした。大晦日の紅白歌合戦で最後に歌われた曲<sup>11</sup>の一部である。さすがに、歌詞だと著作権の問題もあって、勝手に改変はできなかったのだろう。

年は変わって、今月の1日に、そのNHKに本学の学生が出演した。関西ローカルの番組なので、見れた人は限定されていると思うが、「あほやねん！すきやねん」という、題名からして関西色濃厚な番組である。その中の「キャンパスナビ」というコーナー（というよりその日はこれがほとんどすべて）で、本学の聖歌隊と書道部が生出演して紹介された。生という重圧にもめげず、マイクを向けられても上がらず、健気に答えていたと思う。

合わせてキャンパス内の映像が録画で紹介されたが、その中で、女子大のよいところは、と聞かれて、「スピンでも来れる所です」と答えていたのがそのまま字幕になっていた。今までだったら「来られる」と書き直されているところである。全体に軽いノリ

<sup>10</sup> 学校文法は一定の規範を教えるので、こう呼ばれる。これに対して、言語学者が研究の対象とする文法は「記述文法」と呼ぶ。

<sup>11</sup> 2010年12月31日第61回NHK紅白歌合戦の大トリ、SMAPによるThis is love（詞・曲 LOVE PSYCHEDELICO）。

の番組だからなのか、関西ローカルだからなのか、どちらにしても、NHK も少しずつ変わっていくのかもしれないと思って興味深かった。

というほど大袈裟な話でもないのだが。

## 12. 50 Words for Snow 2012.02.29

雪が多い地域に住む人の言語は雪をより細かく言い分けるようにできている、というのは一見もっともらしく響くが、言語学的には正しくない。このような「伝説」でもっとも広く流布してしまったのが、北米に住むアジア系の人々の「雪」をあらわす語に関する伝説だろう。これはほとんど神話の類いである。

もともとは、アメリカの人類学者が、エスキモー人は、雪を少なくとも「積った雪」「降っている雪」「ふぶいている雪」「雪のふきだまり」を別々の語で言い分けていると言い出したことに端を発するが、それが、言語学者の手になる入門書などで尾鰭がついて、4 から 6、10、20、50 と「雪」をあらわす語の数が増幅していった。

詳しい顛末は前に『言語学の方法』という本<sup>12</sup>の中で紹介したので省くが、英語でも簡単に 22 個以上の雪をあらわす語があげることができるということを言っている人もいる。これは、何をもって別々の語と数えるかをいい加減にすると、語の数だけが一人歩きをするという例である。拙著では、日本語でも、いい加減に数えれば、30 近くあげることができる指摘しておいた（その中には、もちろん、「雪達磨」も入っている）。

ところで、標題だが、これは、イギリスのシンガー・ソングライターの Kate Bush の昨年の同名のアルバムの中に収録されている曲である。drifting, twisting, whiteout, avalanche などの、比較的わかりやすいものから始まり、男性のナレーションで英語の雪に関する(?) 語が延々と語られ、Kate は「あと 44 語」とか急ぎ立てているだけの曲だが、だんだん、そのままでは「雪」をあらわす語とは考えられないものになってくる。crème-bouffant のようなフランス語、peDtaH 'ej chIS qo' のような Klingon も出てくる。ようやく最後の 50 番目に snow が出るが、これで英語に雪をあらわす語が 50 もあるとは誰も思わないだろう。つまり、他の言語でも同じことではないかと納得させる。

このように、伝聞によって情報が伝わるときに、言葉が一人歩きをするということがある。それが言われた前後の文脈を忘れて、あるいは意図的に無視して一部だけを伝え、結果は思いもかけないことになる。今日ではインターネットによって情報があっという間に伝わるが、その際に前後の文脈を剥ぎ取った形になってはいないか、注意していかないととんでもないことになるのである。

## 13. 右 2012.08.31

ことばの意味をことばを使って定義するのはむずかしい。意味論の教科書ではたいいてい「意味とは何か」という問題から入るが、実は意味論で一番むずかしいのはこの問題なのだ。

<sup>12</sup>郡司・坂本 (1999)。

多くの場合、「意味とは何でないか」が説かれる。つまり、いくつかの候補をあげて、一つ一つ、それは違うと言っていくのだが、では意味とは何なのか、というのは結局よくわからないままであることが多い。

「意味でないもの」の一つに辞書の定義がある。国語辞典を考えればわかるが、単語を別の単語で定義しようとする場合、その定義に使われている単語をあらかじめ定義しておかなくてはならない。これは無限に続くか、多くの場合、循環してしまう。

必要最少限の基本語を定めておいて、それだけを使って記述すれば循環にはならないが、何をもって基本語とするかがむずかしいし、そのような基本語の定義はどうするのかという問題は依然として残る。

循環してしまう典型的な例が、「右」のような基本的な語である。例えば、「南を向いた時、西にあたる方」のような辞書<sup>13</sup>の記述があるが、ここで「南」と「西」の意味がわからなければ、「右」の意味はわからない。そして、同じ辞書で「南」を引くと、「日の出る方に向かって右の方向」とある。見事な循環である。

辞書の中には、方角以外の言葉で定義しているものもある。「心臓のない方」のような定義である。<sup>14</sup> 心臓は実際には体のほぼ真ん中にあるし、まれに内蔵逆位の人もいるので使えない。お箸や鉛筆をもつ手というのも、もちろんだめである。

一つだけ、思わず、小膝たたいて「うまい!」と思ったのが「この辞典を開いて読む時、偶数ページのある側」という定義。<sup>15</sup> 「偶数」の定義に「右」は出てこないから、循環しない。この辞書の編者<sup>16</sup> は数理的な言語の研究で知られる先生なので、こういう発想がお手のものなのかもしれない。

ただ、一つだけ問題がある。今日、辞書は電子的に引く場合も多い。電子版で「右」を引いたときにも通用するような定義は考えられるのだろうか。ちなみに、上の辞書の電子版の「右」の定義は、紙の辞書の定義と違って「奇数ページ」である。はて?

## 14. シュレーディンガーの三毛猫 2013.05.31

「シュレーディンガーの猫」という話がある。蓋をした箱の中に一匹の猫を入れておき、中に、半減期が1時間の放射性物質を入れておく。1時間後に確率50%で放射線がとび出すと、検出器に連動した装置が青酸カリの瓶を壊し、毒ガスが発生して猫は死ぬ。蓋を閉めてから1時間たったとき、はたして猫は死んでいるか生きているか、という問題である。

蓋を開けてみたら、どちらかが判明するが、蓋を開ける直前に猫はどのような状態にあるのかというと、量子力学では、2つの可能な状態の「重ね合わせ」であるとする。つまり、可哀相な猫は半死半生の状態にあり、蓋をあけて「観測」することによって、状態が1つに収束して生死が決まると考える。

<sup>13</sup>例えば『広辞苑』。

<sup>14</sup>例えば『明鏡国語辞典』。

<sup>15</sup>『岩波国語辞典』(西尾他, 2019)。

<sup>16</sup>『岩波国語辞典』の編者は複数いるが、ここでは、その中の一人、故水谷静夫氏を指す。

個人的には、猫を殺してしまうのは可哀相なので、青酸カリの代わりに墨汁にしておき、はじめに全身白い猫を入れておいたら、蓋をあけたときに白猫のままか、黒猫に変身しているか、という問題にしたらよかったのと思う。そしたら、「重ね合わせ」というのは三毛猫（二毛猫?）のようなものになるのだろうか。蓋を開けたら真っ白か真っ黒に収束する?

言語の世界でこれに対応するのが「曖昧文」である。解釈が2通り以上ある文だが、文の形としては1つなので、複数の解釈が「重ね合わせ」の状態にあると言えるかもしれない。有名なところでは「屋根まで飛んだ」というのがある。これが通常の「シャボン玉飛んだ」の後だと、シャボン玉の飛んだ先が屋根であったということだが、「台風が来た」の後だと、屋根そのものが飛んだことになる。文脈を与えることによって、解釈が一つに収束するのである。

大学というところも、シュレーディンガーの猫のように曖昧なものだという気がする。言うまでもなく、大学は教育機関なので、われわれの用語で「教学」ということが一番大事な業務だが、その一方で、学校法人として成り立っていくために、「経営」という観点を無視することはできない。この2つの業務を全く違った人たちが担当していればそれぞれに割りきれられるのだろうが、それはそれで、様々な問題が生じかねず、多くの場合、両方に片脚ずつ突っこんだ人たちが大学の運営をおこなっている。

われわれは、蓋を開けてみたら、半死半生ということではないまでも、墨汁まみれになってあくせくしている、というところが実体なのかもしれない。

## 15. 先生付け 2013.07.31

日本語では二人称の代名詞が、かなり使いにくい。日本語を母語としない人が、日本語の二人称代名詞は「あなた」であると教わって使うと、たいいていの場合、失礼な言い方になってしまう。

名前がわかっているならば、それに「さん」を付けると問題なさそうだが、必ずしもそうではない。会社で社員が先輩を呼ぶときも、「鈴木さん」より「鈴木先輩」の方が丁寧な言い方であるような気がする。ましてや、平社員が課長、部長、社長などを「～さん」と呼んだらどうなるのだろうか。左遷だろうか。

一般に、日本語では、役職者はその肩書で呼ぶ方が丁寧な印象を与える。おそらく、名前など省いて、「課長」とか「部長」とか言う方が普通だろう。（ただし、会社の方針として肩書で呼ばずに「～さん」と呼びあうことにしよう、としている会社もあることは聞いたことがある。）

大学というところは、また別の原則が適用される場所のようである。「助教」「准教授」「教授」という段階はあるが、「上司」「部下」という関係ではないので、助教や准教授が教授のことを、「教授」とか「鈴木教授」と呼ぶのは、ドラマの中だけである。実際は「先生」とか「鈴木先生」とか呼ぶことが多い。

学校の中で、このように、同僚を「先生付け」でお互いに呼ぶことは、かなり一般化していると思うが、外から見たらどうなのだろうか。実際、学会などでよく知っている

研究者どうしは「さん付け」で呼ぶことの方が多いから、ある意味、「先生付け」は、特殊であり、ちょっと距離を置いた呼び方なのかもしれない。

学生にとっては、教師は文字通り「先生」であるから、「先生付け」で呼ぶのが当たり前のような気がするだろうが、意外にそうでもない。自分が学生だったころを振り返ってみると、面と向かっては「先生」と言うが、学生どうし、あるいは研究室の助手が相手だと、教授を「さん付け」で呼んでいたような気がする。これは、自分が所属していた大学の特定の学科だけでの（生意気な）風習だったのかもしれないが。

数年前から、個人的にはもう一つの呼び方が誕生して、また一つ居心地の悪さを感じている。「学長」という呼び方である。特に、学生からこう呼ばれるのは、何年たっても慣れない。一番なじんでいるのは「先生付け」であるが、最近は「さん付け」も抵抗がなくなった。

しかし、「教授」と呼んでくる学生とは口をききたくないと思う。

## 16. 「ことば」を残す 2013.09.30

言い古されたことわざだが、「虎は死して皮を留め、人は死して名を残す」という。<sup>17</sup>しかし、名よりも、人にまつわることとして残るのは、その人の言ったこと、書いたことではないだろうか。つまり、人は死んで「ことば」を残すのである。

もっとも、ソクラテスのように、自分の死後に、「ことば」が生きていたときの状態とは無関係に残るのが嫌で、著書を残さなかったと言われる哲学者もいる。彼の場合、弟子のプラトンが師匠の言ったこと、おこなったことを勝手に書き残してしまったために、ソクラテスの思い通りにはならず、後世のわれわれにはありがたいこととなったわけだが。

今、一人の友人の言語学者のことを偲んでいる。彼は、ことばが好きで、ことばを研究する人が好きで、ことばを研究する人と一緒にいることが好きだった。学者である以上、数多くの論文や著書を残しており、彼が残した「ことば」はかなりの量に上る。

しかし、ここでは、そういう公の「ことば」ではなく、記録に残されることはなかったかもしれない「ことば」を記録しておきたいと思う。

ずいぶん前の話になるが、今でも時折思い出すのは、彼が、ある指導学生の研究発表のときに、内容でなく、例文の作り方に注意をしたことである。言語学の論文では、しばしば例文を自分で作る。その言語の母語話者ならば誰でも容認するであろう例文と、誰も容認しないであろう例文を並べ、理論の予測を検証するのである。

例文には、議論のために、特定の文法構造をもたせる必要がある。例えば、主語と目的語をとる他動詞を含む例文が必要な場合がある。そんなとき、安易に他動詞を選ぶと、英語でも日本語でも、「殴る」とか「殺す」というような、よく考えると物騒な動詞を使ってしまうがちである。

彼は、そういう、例文のもつ暴力性に敏感だった。研究発表の場でも、当該の学生に「何度言ったらわかるんだ」というような言い方で、例文の中の動詞を批判していた。確

<sup>17</sup>鎌倉時代の『十訓抄』によるとされる。

かに、他の他動詞の例として、「褒める」とか「なでる」などがないわけではなく、意識的にそのような動詞を選ぶべきだったのだ。

彼、Stanford 大学の Ivan Sag は 2013 年 9 月 10 日に、3 年近くの癌との闘いに敗れ、世を去った。以来、生前の彼の業績・人柄を偲ぶ文章は、数多くの友人によってインターネット上に掲載されている。ここに書いたのは、一つの個人的な思い出にすぎない。

Rest in Peace.

## 17. 雪 2014.02.28

今月は、普段あまり雪の降らない地方にも大量の雪が降り、積もった。2 月 8 日の雪は、神戸ではあまり積もらなかったが、東京では大雪となり、たまたまその日に東京出張だったために、久し振りに雪の降りゆく中を歩くはめになった。

午後からの会議だったが、余裕を見て、朝東京に着く便に変えたのが功を奏し、大した遅れもなく着くことができた。その結果、美術館に寄る時間もできたが、午後からの羽田発着の便は軒並欠航となってしまっていた。そんな中、東京での会議は予定通り開かれ、沖縄から北海道まで、ほぼ欠席もなかったのは驚きだった。

雪は、白という色のせいもあって、ただ眺めるだけならば、優雅なものだとのんびり構えることができる。そのため、「雪」ないし「白雪」ということばは、美しいものを象徴することばとして使われてきた。

前に、言語学の入門書<sup>18</sup>の中で書いたことだが、「白雪」となると、「白い雪」とはかなり性質が違う。まず、「白雪」は、万葉集などには「松蔭の浅茅の上の白雪を消たずて置かむ由はかもなき」<sup>19</sup>のように、雪の美称として使われているが、現代語では雪の意味で使うことはない。(因みに、「松蔭(まつかげ)」は、本学の名称と同字異音だが、万葉集にこの語があるのは偶然である。)

今日では、「白い雪」の意味になるのは、同じ字面を、音読みの「はくせつ」と読んだ場合だろう。訓読みの「白雪(しらゆき)」の方には、雪そのものを指すのではなく、日本酒の銘柄、サトザクラ系の花の名前、「白雪姫」のような人の名前などの用法がある。面白いことに、英語では「白い雪」は white snow だが、「白雪姫」は Snow White と逆順になる。

雪国の人には何を今さらという感じだろうが、日頃雪と縁が薄い地方の人間にとっては、雪が積もれば、雪合戦や雪だるま作りという楽しみが生まれる。単純に、足跡をつけるだけでも、何か非日常という感覚が生まれる。

同じ物質なのに、液体の状態と固体の状態でこうも違って感じられるのは興味深い。とらえどころのない液体よりも、仮につかの間でしかなくとも、手にとってみることのできる固体に、より親近感をもつのだろうか。

冬のオリンピックは終わってしまったが、もうすぐ、同じソチでパラリンピックが始まる。同じ雪の中の競技であっても、見る人が何を感じるかはかなりちがってくるだろう。

<sup>18</sup>郡司 (2002)。

<sup>19</sup>大伴坂上郎女作、『万葉集』巻 8-1654 雑歌。他にも「白雪」の例は複数ある。



自然を制して身体のバランスをとるという点において、より一層の努力が必要なものかもしれない。どの国の選手であっても、健闘を祈りたい。

## 18. 電車が発車します 2014.04.30

いつも利用している電車の発車時のアナウンスが最近変わった。今までは、「電車が発車しています。ご注意ください。」だったが、「電車が発車します。ご注意ください。」となった。つまり、「発車しています」が「発車します」に変わったのだ。

今までのアナウンスは、すでに電車が動き出した後に流れていた。動いている電車に近づくな、ということなのかもしれないが、そんな人がそれほどいるとは思えず、いささか、腑に落ちないアナウンスだと感じていた。一体、何に注意しろというのか。

「発車します」というアナウンスは、電車が動く直前に流れる。これから動くから注意しなさいよ、という意味に受け取ることができて、すんなりアナウンスに従うことができる。「てい」を省くという、ほんのわずかの違いだが、日本語の話者にはその違いが確実にわかる。

日本語の動詞のいわゆる終止形は、現在のことをあらわすことは少なく、もっぱら未来のことをあらわすのに使われる。だから、「発車します」と言う場合は、発車は未来のことであり、電車はまだ止っている。しかし、じきに動くことが確実だから、近づかないように注意ができるのである。

一方、「～ている」の形は、現在進行中の出来事か、すでに起こってしまったことをあらわす。したがって、「発車しています」は、電車が動きはじめた直後と、大分前に発車してしまったこととの間で曖昧性がある。それが、「発車しています。ご注意ください。」の居心地の悪さの原因だったのかもしれない。

例えば、「5分前に電車は発車しています。ご注意ください。」ということも可能である。1時間に1本しか電車が来ない駅では、この場合の「ご注意ください。」は、「電車は当分来ませんから、待っていても無駄です。いったん家に帰ったらどうですか。」ということになるだろう。

さて、4月も末になり、新年度が始まって1か月が経とうとしている。4月なので、新年度は「始まる」のではなく「始まっている」のである。新入生も、大学での90分授業という時間の長さに慣れてきただろうか。高校生のときは、大学に入ったらいろいろと「勉強したい」ことがあると思っていた人も多いと思う。オリエンテーションのころは、「勉強するぞ」と張り切っていただろう。

授業が始まった今の正しい言い方は「勉強しています」である。いまだに「勉強します」では困る。「勉強しています。ご安心下さい」と言ってほしい。学生の皆さん、勉強していますか？

## 19. 情報量 2014.05.31

今年も、チャペル奉仕団の研修が2日にわたっておこなわれた。1日目は大学の会議と重なって参加できなかったが、2日目の朝、キリスト教センター委員の教員による講

話は聞くことができた。

教員の専門が英語学なので、それに関連した、よりよいコミュニケーションをするにはどうしたらよいかという話だった。自分の専門にも関係するので、個人的にはとてもわかりやすい話だった。英語学科以外で学ぶ学生の誰にとっても、専門科目の授業とは違った切り口からの話はわかりやすく、楽しく聞くことができたのではないと思う。

話の中に、聞き手に与える情報量は多すぎても少なすぎてもいけないという原則<sup>20</sup>があった。神戸で話しているとき、住所を聞かれて「兵庫県」のように広すぎる地域を答えるのは情報量が少なすぎて失礼でもある。逆に番地や部屋番号まで言うのは、情報量が多すぎて、相手によっては危険である。

その話を聞きながら、あらためて気になったのが、スイス民謡が元とされる歌の日本語の歌詞である。これも、「あなたの家はどこ？」と聞かれて国名を答えるのである。いかにも情報量の少なすぎる答であり、家の所在地としては、いくらスイスに限られるとしても広すぎる。そのすぐ後に綺麗な湖水のほりにあると続いても、候補はありすぎる。

そこで、これは、海外で留学生（回答者の職業は羊飼ということになっているので、その場合留学ということがあるのかはさておき）どうしが自分たちの出身地の話をしているのだという解釈もあるようである。しかし、そうすると、逆に質問の形が不適切だろう。「あなたの国はどこ？」と聞かないと、異常に情報量の多い答を要求していることになる。どこの国から来たのかも知らない人にいきなり家の住所を聞くのではストーカーである。

この歌は多くの人にとって気になるものらしく、ネット上で様々な言説が流布しているので、屋上屋を架すことは避け、情報量の話だけにしておくが、外国の民謡の歌詞というのはあらためて考えてみると不思議なものが多い。

今日はチャペルコンサートの日で、2013年度のサントリー音楽賞を受賞した、本学客員教授でもある鈴木雅明氏と彼の率いるバッハ・コレギウム・ジャパンの今シーズンの最初の公演だった。チャペル奉仕団のカフェ担当グループも、研修を終えたばかりの新生2人も加わって、全額寄付するコーヒーとジュースの売上げで貢献した。彼女らの「接客」の姿勢にも、適切な情報量の流れがあったのではないと思う。

## 20. カタカナ語 2014.09.30

中学生のころ、授業で、立って教科書を読むときに「コーヒー」がどうしても読めなかったことがあった。

一般に東京方言の話者は「ヒ」の発音が苦手で「シ」になってしまうとされるが、それは誇張であり、「ヒ」ぐらい発音できるさ、と思っていたのだが、ふとしたはずみで、「発音できないスイッチ」が入ってしまったのかもしれない。

仕方なく、「coffee」という発音、つまり「ヒ」でなく [fi] という発音でお茶を濁したが、耳ざとく「あっ、発音がよくなった」と捉えた級友がいた。

---

<sup>20</sup>Grice (1975) 参照。

一般に、外来語の発音は日本語の音韻体系に従って改変される。[fi] という音は本来の日本語にはないので「ヒ」で代用する。しかし、ちょっと前にはやった「フィーバー」は「ヒーバー」にはならず、後発の「フィ」があてられた。

coffee が「コーフィー」となっていたら、東京方言の話者にも発音しやすかったかもしれない。ただし、日本語の体系の中の「フィ」は、上歯で下唇を噛むのではなく、「フ」のときと同じよう唇を寄せて、母音を「イ」に変えるだけなので、cowhee のような発音で代用することになる。

「コーヒー」であれ、「コーフィー」であれ、日本語に対応する語がなく、「珈琲」という宛て字はあるものの、「カヒ」という形で日本語に取り入れられることもなく、訳語が作られることはなかった。

最近では、明治のころのように、「いかにも」というような日本語の訳語を作ることが少なくなっているように思う。例えば、少し前は「国際化」という日本語があった。そもそも英語で internationalization という言い方がどれほど一般的であったかはわからないが、少なくとも international を「国際」と訳した先人の努力は多としたい。

一方、今日の global はどうだろうか。これに対する日本語は今のところ「グローバル」という、そのままの形しか知らない。もともと、globe というのは「地球」ということだから「地球的な」と訳してもよさそうだが、カタカナのままにしている。

最近の大学関係の用語には、「グローバル」を筆頭として、カタカナ語が多い。「リーダーシップ」「ガバナンス」「ラーニング・コモンズ」など、訳語を作る時間もなく、次々に今までなじみのなかった用語（とそれがあらわす概念）が導入されてくる。このままでは、「ユニバーシティ」は「プロフェサー」と「スチューデント」と「ペアレント」が作る「コミュニティ」だということになりかねない。

用語にとらわれずに、しっかり中身を実体化していくことを考えていかないと、まさに「仏作って魂入れず」（英語で何と言うのかわからない）だろう。

## 21. 慣性の世界 2015.05.31

昨年から、学部の授業で iPad を使って教室内のテレビに教材を映したりしているが、教室に WiFi があるので、NHK の高校生向けの論理学入門の番組の Web 版<sup>21</sup> を映して見せたりもしている。高校生向けと言っても、大学の教師が見てもなかなか参考になる番組で、昨年度の授業アンケートから、学生たちにも興味をもてる番組であることが想像できる。

番組は、講義形式ではなく、高校の映画部が、アリスとテレスという、それぞれ女子、男子の高校生の姿のアンドロイドを主人公にした映画を撮っていくという形の寸劇になっている。その過程で、脚本兼監督の高校生が三段論法の使い方などを間違えるので、顧問の先生が解説していく。

映画の主人公の名前は、言うまでもなく、古代ギリシアの哲学者に由来する。アリストテレスは、論理学での功績としても、三段論法を整理したことなどで知られるので、こ

<sup>21</sup><https://www.nhk.or.jp/kokokoza/tv/ronri/>

ここに登場させているのだろう。

アリストテレスは、様々な分野に功績を残しているが、物理学でも、彼およびその後継者の提唱していた「アリストテレス力学」といわれるものがある。これは、今日の日から見れば間違った力学であるのだが、後にガリレオが実証的に反論するまで、長い間信じられていた。

アリストテレス力学では、物体は、外から力が働かない限り静止してしまう。今日の「慣性の法則」、すなわち、物体に力が働かない限り同じ運動を続けるという原理をもつ力学とは大きく異なる。地球上で力を加えない物体がやがて止まってしまうのは、空気抵抗などの摩擦によるのである。

ところで、「慣性」というのは、物体の運動以外にもいろいろと考えられる。変化を好まず、今と同じでよいと考えるのも、一種の人間の慣性だろう。もちろん、変化さえすればよいとは限らないのだが。

言語の意味を解釈する際にも「慣性」を考える必要があるという理論がある<sup>22</sup> 例えば、「ワニに食われたとき、ウサギは海を渡っていた」という文では、ウサギは海を渡ってはいないのに「渡っていた」と言える。これは、ワニに食われることのなかった「慣性の世界」を考えて、その世界では渡っていただろうから「渡っていた」と言えるのだ、とする説である。

何も変化しない慣性の世界のようなものは、われわれも日常的に使っている。さもなければ、目覚まし時計を翌朝起きる時間に合わせることに意味を見出せなくなってくる。

慣性の法則を知らなかったアリストテレスは、慣性の世界も知らなかっただろう。常に力を加えていなくてはならない、今の世界のみ生きていたのかもしれない。

## 22. We 2015.08.31

日本語では、しばしば主語を表現しないで文を作る。これを盾にとって、「日本語に主語はない」という見当違いな主張をする人がときどきいるが、表現しないことと存在しないこととは違う。日本語にも主語はあるのだが、表現しなくてもよい場合が多いということにすぎない。

一方、英語では基本的に主語は必ず言わなくてはならない。例えば、「雨が降る」は rain という一つの動詞で言ってしまうのだが、動詞だけでは文にならないので、意味のない it を主語の位置に置かななくてはならない。

こういう違いは、同じ内容の日本語と英語の文書を作る場合に問題になる。主語の表現されていない日本語の文を英語でどうあらわすか。受身文にして不自然な文にするよりは、日本語で表現されていない主語を補う方が望ましい。日本語で表現されていないものは一人称であることが多いから、たいてい、I か we を補うことになる。

その場合、今度は、単数の I にするか複数の we にするかという問題が生じる。もとの日本語の文では、単複の区別が曖昧なことが多いからである。はっきり話し手個人の話

---

<sup>22</sup>Dowty (1979)。

としているのか、少し一般化して、話し手を含む複数の人間を話題にしているのかが微妙なことが多い。

英語の一人称の問題は学術論文の際にも問題となる。一昔前は、筆者が個人であっても、I は避けるべきだ、というような教えがあったそうだが、最近では、書き手の責任をはっきりさせるために、積極的に I を使うべきだということになっている。

それでも、単著論文でも we を使うことがある。一つは、新聞の社説などの、いわゆる“editorial we”であり、論文の執筆者は一人だが、「実験などに関わったみんな」というつもりで、we have found … のように書くことがある。もう一つは、「読者と私」という意味での we。例えば、Let us discuss this finding … などというのは、読者も一緒に考えてみましょう、という感じだろうか。

We に関連して、半月ほど前のさる談話の日英それぞれの版を読み比べてみて、日本語版に意外に主語なしの文が少なく「私たち」という言い方が多いことに気づいた。英語版ではもちろん we が多用されている。主語を明確に述べるのが原則の英語版と統一するために日本語版も主語を明確にせざるを得なかったのかもしれない。

しかし、どのような意味での「私たち」であり we であるのかはわからない。英語版にごくわずかに登場する I に相当する日本語は見つけられなかった。

## 23. 曖昧性 2015.09.30

「曖昧」という言葉はそれ自体が曖昧で、単に意味がはっきりとしないという場合と、意味が2通り以上あるという場合がある。言語学では「曖昧性 (ambiguity)」は通常後者の意味に用い、前者には「漠然性 (vagueness)」という言い方をすることがある。

「曖昧性」は「多義性 (polysemy)」ということもあり、典型的には、そもそも単語に2通り以上の意味がある場合の語彙的曖昧性がある。「おばちゃん」「おじちゃん」などは親戚関係にある人間を指す場合と、単に、一定の範囲の年齢の人間を指す場合がある。これらを含む表現、例えば「電車の中で突然おばちゃんから飴をもらった」も同様に2通り以上の意味をもつことになる。

一方、構造的曖昧性というのは、単語そのものには多義性はないのに、文の構造に2通り以上の可能性がある場合である。例えば、「昨日福山と千原が結婚したとの発表があった」は、福山と千原とが婚姻関係を結んだという意味と、福山と千原のそれぞれが、別々の人と結婚したという意味がある。そして、実在の人物の場合には、解釈は一つに定まる。

さて、次のような文はどのように解釈されるだろうか。

A、B については、C や D への転換に積極的に取り組むよう努めることとする。

これのもとの文については、多くの人が、A、B ともに、C や D をしなくてはいい、特に、C を求められていると解釈し、大変なことになったと考えた。

これは、実際に今年の6月に文部科学省が国立大学法人に対して発した文書の一部であり、A～Dを復元すると次のようになる。

教員養成系学部・大学院、人文社会科学系学部・大学院については、... 組織の廃止や他分野への転換に積極的に取り組むよう努めることとする。

これではどうしても、どちらの学部・大学院も「組織の廃止」も含めた改編に努めないといけなと解釈してしまうだろう。国立大学には人文系学部はいらない、という危惧を多くの人がもったのも無理はない。

ところが、9月になって、実際は、「通知を作った役人の文章力が足りなかった」という文科省幹部の「釈明」で、「組織の廃止」は前者（の一部）のみに関わるということが明らかになった。

「A、B」と「CやD」という並列の表現を並べ、CはAのみに、DはBのみに関わりと解釈するのは相当の読解力を必要とする。「文章力」のある人ならばせめて「それぞれ」を「組織の廃止」の前に補うだろう。

芸能人の結婚問題ならば背景の知識により誤解は生じないが、背景のわからない公文書は努めて曖昧性のない形で発信してほしい。

## 24. サンタクロース 2015.12.25

クリスマスの日、大学での行事は何もなく、休校日だ。それぞれが思い思いの形でこの日を過ごせばよいということである。今日は家で、60年前の間違い電話からはじまったという、NORADのサンタ追跡をちらちらとながめながら仕事をしていたが、配達は無事終了したようだ。今年は全世界に約73億のプレゼントを配ったと発表されている。

先週末までの大学のクリスマス行事では、礼拝をはじめとして、一般にクリスマス・ソングとして親しまれている聖歌をよく歌った。3年前に聖歌以外のクリスマス・ソングに2種類あるという見方を紹介したが、<sup>23</sup> 今日はその中の、「家族や友達・恋人を想う歌」の一つについて、あらためて書くことにする。

この時期の定番の一つとなっている、松任谷由実の「恋人がサンタクロース」の助詞の使い方にかねてから疑問をもっていた。「恋人はサンタクロース」ではないのか、と。

要するに、恋人のいない人が、「でもサンタが私の恋人だ」と言っている歌かと思っていたのだ。ところが、歌詞をよく読んでみると、「となりのおしゃれなおねえさん」が、幼い（でもサンタはもう信じていない）私に言っている言葉なので、これは、「私には恋人がいるのよ。今夜はその恋人がサンタになってくれるのよ」という歌のようなのである。

ただ、そうすると、その後の「本当はサンタクロース」という部分がよくわからない。この恋人は本物のサンタなのかかもしれない。すると、その前の文の解釈も違ってくる。「あなたはサンタはいないと思っているの? 実は、私の恋人がサンタなのよ。ああ見えても本当はサンタなのよ」ということになる。

<sup>23</sup> 聖歌以外に、「家族や友だちなどを想って歌うもの」と「ジョーク」がある。

要するに、「恋人がサンタクロース（になってくれる）」という常識的な解釈でなく、「恋人がサンタクロース（そのものである）」というサンタ実在説に立つ解釈ということになり、両者はかなり違う。

そして、驚くべきことに、歌詞の他の部分を読んでも、後者の解釈の方が辻褄が合うのである。何しろこのサンタは、雪の街から来て、おねえさんを遠い街につれて行ってしまうのだから。

1980 年のこの歌は、つい最近までの日本でのクリスマスのあり方を、サンタの到来を楽しみにしている子供のための日から、恋人どうしが過ごす日という形に大きく変えるきっかけになったと言われている。それは、もちろん「恋人」がサンタ役をしなくてはならないという解釈によるものだ。

しかし、実は、これは、たまたま本物のサンタを恋人としていた「となりのおしゃれなおねえさん」の話でしかないのだとすると、ちょっと前までの多くの若者は、とんでもない勘違いをしてきたことになる。

罪作りの歌である。<sup>24</sup>

## 25. 卒業 2016.03.31

3 月は卒業のシーズンである。「卒業」という言葉は、学校の課程を終える場合だけでなく、漫画とかゲームとか芸能人とか、一時夢中になっていたことに、もやは関心をもたなくなる場合にも用いられる。「社会人になる以上、もう、FF は卒業だ」のように。

また、最近では、今まで続けていた仕事に区切りをつける場合にもこの言葉が使われるようになってきた。典型的なのは芸能界で、グループから抜けるときだろう。また、テレビなどで、一つの番組の担当からはずれる場合にも使われる。「脱退」とか「担当終了」というドライな言葉より、前向きな感じがして好まれるのかもしれない。

このような「卒業」に通常涙は伴わない。「卒業」が必ずしも「別れ」を意味しないからだろう。「脱退」と「引退」とでは、かなり印象が違う。

教育課程の「卒業」に関しては、保育園・幼稚園の「卒園」からはじまって、小学校、中学校、高等学校、大学の「卒業」、そして、大学院の「修了」と、数多くの節目がある。人生は連続しているのに、あえて区切りをつけたがるというのは、「終わり」よりも「始まり」を意識したいという希望のあらわれなのかもしれない。

「卒業」を自らのこととしてでなく、卒業していく彼女らを見る立場に立つと、彼女らは去っていき、自らは残る、というより「取り残される」という寂しさのようなものを覚える。いくら、送別のパーティやら打ち上げを賑やかにやっても、そのときはよいが、翌日、ふと我に返ったときの喪失感は大い。

考えたら、学生には卒業があっても、教育する側には卒業はないのだと、しみじみ思う。

さて、この「学長ブログ」もいよいよ「卒業」の日を迎えた。Diary と言いながら、月

<sup>24</sup>最近、この歌を論じた文章を含む、とても面白い本(川添, 2021)が出版された。「恋人がサンタクロース」の論考では、この歌のタイトルにおける「は」と「が」の問題を論じている。語調は柔らかいが、今までの研究を踏まえた上で読み易いエッセイに仕立ててあるので、一読の価値がある。

刊ブログのようになってしまっていたが、何とか続けることができたのも、時々、思いがけない人から「読んでいますよ」と言われることがあり、しかも、その場合、しばしば好意的な反応を見せてくれる人がいたからだ。

8年間、自らへの課題として続けてきたこの営みに終止符を打つのは、ほっとするとともに、一抹の寂しさを覚えないわけでもないが、任期は任期である。こちらのほうは、さすがにほっとしている。

今まで読んでくださった方にはあらためて御礼を言うとともに、また、いつか、別の形で目にかかることもあるかもしれないということを期待して、キーボードから指を離すことにしたい。

長い間、ありがとうございました。

### 参考文献

- Chandler, Raymond (1958) *Playback*. London: Hamish Hamilton, 日本語訳, レイモンド・チャンドラー, 『プレイバック』(清水俊二訳) ハヤカワ・ミステリ文庫, 1977.
- Dowty, David R. (1979) *Word Meaning and Montague Grammar: The Semantics of Verbs and Times in Generative Semantics and in Montague's PTQ*. Dordrecht: Kluwer.
- Grice, H. Paul (1975) Logic and conversation. In: Cole, Peter and Jerry Morgan (eds.) *Syntax and Semantics 3*: 41–58. New York: Academic Press. Reprinted in *Pragmatics: A Reader*, ed. Steven Davis, Oxford University Press, Oxford, 1991, pp. 305–315.
- 郡司隆男・坂本勉 (1999) 『言語学の方法』 岩波書店, 東京.
- 郡司隆男 (2002) 『単語と文の構造』 岩波書店, 東京.
- 西尾実・岩淵悦太郎・水谷静夫・柏野和佳子・星野和子・丸山直子 (編) (2019) 『岩波国語事典 第8版』 岩波書店, 東京.
- 川添愛 (2021) 『言語学バーリ・トゥード』 東京大学出版会, 東京.
- 松本修 (1993) 『全国アホバカ分布考 はるかなる言葉の旅路』 太田出版, 東京, 1996年に新潮文庫に収録.
- Pustejovsky, James (1995) *The Generative Lexicon*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- 斗鬼正一 (2015) 「エスカレーター片側空けという異文化と日本人のアイデンティティ」『江戸川大学紀要』 25: 35–50.
- 柳田國男 (1980) 『蝸牛考』 岩波文庫, 東京, 初出は 1927 年『人類学雑誌』第 42 巻 4-7 月号. 単行本は 1930 年刀江書院発行. 岩波文庫版は 1943 年創元社発行による改訂版に基づく.
- 屋名池誠 (2003) 『横書き登場—日本語表記の近代—』 岩波新書, 東京.

**Author's web site:** <http://sils.shoin.ac.jp/~gunji/>

(受付日: 2021. 12. 10)